

(1)

乾

☰☰

乾レ下
乾上
(乾為天)

本文

乾は、元いに亨る。貞しきに利し。

初九、潛龍なり。用うること勿れ。

九二、見龍、田に在り。大人を見るに利し。

厲けれども咎无し。

九三、君子、終日乾乾し、夕べまで惕若たり。

九四、或いは躍らんとして淵に在り。咎无し。

九五、飛龍、天に在り。大人を見るに利し。

上九、亢龍なり。悔い有り。

咎无し。

用九、羣龍を見る。首たること無くして、吉。

解釈

乾は純陽の卦、その形体は天、そのはたらきは健である。天の運行は至健で止むことのないのに象る。その占は、諸事望み通り進み、大いに亨通する。ただ万事においてよく貞正を固守するのがよろしい。

初九は最下の陽爻、陽気の地下に潜在することを示す。龍が乾の象であるから、初九は淵に潛み隠れている龍の象である。まだその才徳を施用すべき時ではないので、その占は施し用いることなれとの戒辞である。

九二は進んで下体内卦の中に居る。初九の潜を出で隠を離れて、今や地上に姿を現した龍の象である。「大人」は人徳のある人、九二と九五に見えるが、ここには「在下」（九二）のそれで「在上」（九五）の大人に対する。一般（常人）にはこの「在下」の大人を見るによろしく、その徳ある者は「在上」の大人を見るによろしとする占である。

九三は更に上り内卦の上、外卦の下にあり、重剛不中で「三」の危地に居る。龍を象とする君子、終日、乾乾（健健）として努めて止まず、夜になつてまで惕然として恐れ慎み反省する。かくして始めて危地にあつても災い咎めを免れることができるとの占である。

九四是内卦を離れて外卦の下、君位の近くに進み、進退のまだ定まらない多懼の地に居る。然るべき時に躍り上がれば、必ず天に昇るが、まだ今は躍り上がらず淵に潜む龍の象である。従つて多懼の地に居るが、何の咎めもないとの占である。

九五は陽剛中正を以て君位に居り、乾の卦主である。そこで飛龍の天にあるの象を探る。この大人は「在上」のそれである。一般にはこの「在上」の大人を見るによろしく、その位にある者は「在下」（九二）の大人を見るによろしとの占である。

上九は陽剛の極、外卦の終りに居る。飛龍も高きに過ぎ、上りつめて下ることができない亢龍の象である。当然、悔いありの占である。

用九は陽爻の変じて陰爻に之くの道である。乾の諸陽爻を見るに、いずれも変じて陰爻となり、物の首とはならない。よく柔順なる道であり、吉である。

背景

乾は卦の名。「乾下乾上」は、「下を乾とし上を乾とす」と読み、下卦の三画・上卦の三画、いずれも乾卦であるの意。「乾為天」は、「乾を天と為す」と読み、乾卦は天を象徴することを示す。

上下六爻がすべて陽爻の純陽の卦であり、坤卦（純陰卦）とあわせて六十四卦の代表格である。「乾」の字は、軌と乙とから成る。「軌」は日が出て光のかがやくさま、「乙」は物のびて達るさま（『説文』）。そこから「健」と解し（『説卦伝』）、力強く伸びやかに進むという剛健、壮健、勇健の義を表す。卦辞「元いに亨る。貞しきに利し」は、周の文王が繋けた辞とされ、一卦の吉凶を占断した彖辞（卦辞）である。彖伝・文言伝はこれを「元・亨・利・貞」の四徳と解し、諸家（王弼注・程伝）はしたがうところであるが、朱子は「元亨。利貞」の両占辞としている（『周易本義』）。

(1) 乾 ䷀

初九「潜龍」は、潜み隠れている龍。初九（潜龍）→九一（見龍）→九五（飛龍）→上九（亢龍）と、龍の変化に比擬して進退の道を表している。九二「見龍」は潜み隠れていた潜龍が、地上に現れたもの。「田」は地上の意。「大人」は大徳のある人。「用うること勿れ」とは、事をなしてはよく